

大豆 カメムシ類について



図1 ミナミアオカメムシ (右) 白色帯型



図2 イチモンジカメムシ

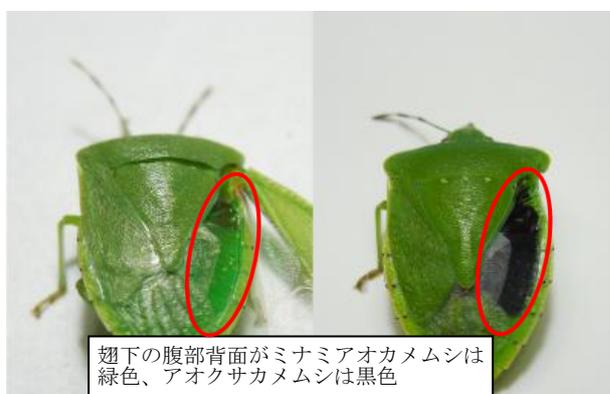


図3 ミナミアオカメムシ(左)とアオクサカメムシ(右)の見分け方



図4 大豆の被害粒

1 生態

大豆を加害するカメムシは多種いるが、本県での主要な加害種は、ミナミアオカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシ、ホソヘリカメムシである。

大豆での主な被害は、成幼虫が莢や子実を吸汁することにより発生する。吸実性カメムシ類は着莢期より大豆ほ場へ飛来し、莢が黄化する時期まで加害する。吸汁害を受けた莢(子実)の被害様相は生育ステージにより異なる。莢肥大初期では莢が黄変し落下するため、生理落下と区別が付きにくい。子実肥大初期では不稔となり、後期では加害部位の変色、登熟後は奇形となることもある。肥大終了期では外観上、被害はわかりにくい、子実内部が吸汁されており品質が低下するほか、転流異常により、株が青立ちすることで、汚損粒の原因にもなる。

ミナミアオカメムシ

成虫は体長約12~16mm、体色はおおよそ緑色だが、色彩変異がある。アオクサカメムシに外観上似ているが、腹部背面(翅下の腹板背面)が緑色(アオクサカメムシは黒色)であることなどで識別できる。枯れたイネ科植物で覆われた地表や針葉樹の枝葉や葉鞘の内側など広範囲の場所で、成虫で越冬す

る。冬の寒さに弱く、越冬可能地域が制限されるが、暖冬傾向により分布域が拡大している。近年、冬期の施設栽培ほ場でも発生・増殖が確認される。

イチモンジカメムシ

成虫は体長約9～11mm、体色は淡い緑色で、胸部背側に一文字帯状の模様（雄は白色、雌は紅色）がある。樹皮の隙間や落ち葉の下に隠れて成虫で越冬し、年2回程度発生する。

アオクサカメムシ

成虫は体長約12～16mm、体色は緑色で、体型はやや細長い六角形で扁平である。日当たりのよい場所の常緑植物の葉間や茂みの中などの場所で、成虫で越冬し、年2回程度発生する。

ホソヘリカメムシ

成虫は体長約14～17mm、体色は暗褐色で、体型は細長く、後脚が長い。日当たりのよい草むらのイネ科雑草の株間、針葉樹林下などで、成虫で越冬し、年2～3回程度発生する。

2 発生状況

開花期頃よりほ場内への飛来が認められ、ほ場内で莢などを吸汁しながら産卵する。孵化幼虫は中齢以降になると分散し、莢・子実を加害する。

吸実性カメムシ類1頭が1日あたりにおよぼす被害はイチモンジカメムシが約4粒、ホソヘリカメムシ約2.5粒、アオクサカメムシ1.5粒程度である。

なお、マルカメムシなど茎葉を加害するカメムシ類もいるが、吸実性カメムシ類と比較し、被害は軽度である。

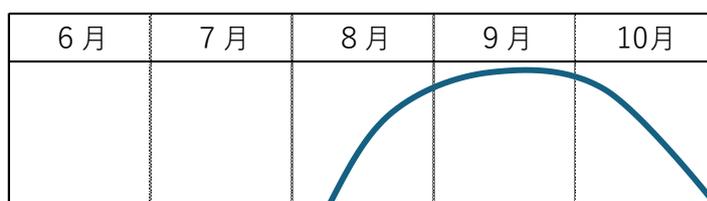


図5 大豆ほ場内での吸実性カメムシの発生消長

3 防除対策

(1) 飛来状況の確認

ほ場への飛来は、開花期頃よりみられる。飛来初期は、ほ場の周辺部にみられることが多いため、畦畔での発生状況を確認する。

(2) 雑草管理

ほ場周辺畦畔や休耕田などに雑草が繁茂していると多発するため、除草を徹底する。

(3) 薬剤選択

薬剤による防除は、ほ場での発生程度により異なるが、多発ほ場では開花終了期、莢伸長期、子実肥大中期に行う。なお、薬剤防除を行う場合、地域全体で一斉に行うと効果が高い。